

宮沢賢治記念館通信

発行 〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36

宮沢賢治記念館

☎ (0198) 31-2319
FAX (0198) 31-2320

「花巻市郊外でつけたユリの林」 撮影：中里和人

ウィーンの森

宮沢賢治記念館長 牛崎敏哉



本年生誕130周年を迎える宮沢賢治。それに合わせるかのように、525年以上の歴史を誇るオーストリアの「ウィーン少年合唱団」が5月8日(金)、お隣北上市での公演を前に宮沢賢治記念館を初めて訪れました。初の

日本語アカペラのオリジナル曲「MoonBoat (月の舟)」を披露することから、歌詞の着想の一部となっている賢治の世界観を体感し、賢治や花巻の関係に理解を深めようと企画されたとのこと。「天使の歌声」と称される同団は多国籍の10～14歳を中心に構成され、同日の訪問は指揮者のマノロ・カニンさんとブルックナー組の少年23名でした。

「月の舟」は、同団の世界ツアー開始100周年を記念し、英国を拠点に世界で活躍する作曲家・藤倉大さんが書き下ろした日本語の新曲。藤倉さんといえば7年前の映画「蜜蜂と遠雷」(原作：恩田陸／監督：石川慶)の劇中楽曲《春と修羅》の作曲者ということで思い出される方もいることでしょう。

午後2時30分に御一行を玄関でお出迎えし、館内ご案内で私がまず向かったのは常設展示の最初の「宮沢賢治のフィールドコーナー」、賢治のメッセージがパネル展示されています。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」

ご存知「農民芸術概論綱要 序論」からの言葉です。この左側に、賢治が敬愛するベートーヴェンの姿を模した「大正15年春頃」の写真が並んで

あります。

「農民芸術」は今からちょうど百年前の大正15(1926)年1月に、花巻農学校内に開設された国民高等学校で始まりました。農村の中堅指導者を養成する目的で3か月の短期間の学校として、各村から35名が参加し、賢治先生はここで「農民芸術」を講義し、ベートーヴェン百年祭と称してレコードコンサートを開催。賢治先生にとって「田園交響曲」はとりわけ愛した曲だったので、第二楽章第一主題に「弓のごとく」という日本語の歌詞まで付けています。

ここでウィーンと花巻が重なりました。

ベートーヴェンは1770年にドイツのボンで生まれましたが、成人後の1827年に亡くなるまでの35年間をオーストリアで過ごしました。20代後半から持病の難聴が悪化、人生に苦悩し、32歳のとき、ウィーン郊外のハイリゲンシュタットで「ハイリゲンシュタットの遺書」を記し、自殺を考えるものの苦難を乗り越える道を選択します。ベートーヴェンは自然をこよなく愛し、ウィーンの森や郊外の野を歩きまわり曲想を練ったといえます。「遺書」を書いた6年後、「ベートーヴェンの小径」と知られるハイリゲンシュタットの小川沿いの散歩道で「田園交響曲」を作曲したといわれています。

宮沢賢治は国民高等学校終了後の3月いっぱい農学校教師を辞し、「本統の百姓」として、宮沢家の別宅にて農耕生活に入り、「羅須地人協会」での実践活動を決意し、「農民芸術概論」を講義していくことになります。農学校の実習田に立つ賢治の写真はウィーンの森で困難に立ち向かうベートーヴェンと重なります。

団員たちとともに展示室にて賢治の人物像や生涯、音楽家ベートーヴェンやウィーンとのつながりなどを巡り、最後に、これも百年前の「1926」の賢治のサインがある愛用のチェロをご案内した後は、ウィーン少年合唱団の皆さんが賢治サロンにて来館者や関係者を前に「月の舟」を日本語で合唱し、きれいな歌声を響かせてくれました。メンバー唯一の日本人のテンブウさん(15)はメディアのインタビューに「賢治さんはウィーンが好きだったと聞き、団員として、日本人としてありがたい」と答えておりました。

心配された雨にならず、賢治記念館が建つ胡四

王山にはウィーンの森の透き通った5月の風が、シジウカラやヤマガラ、メジロなどの鳥たちのさえずりとともにさわやかに吹き抜けていったのでした。



岩手県イーハトーヴ町へ 1976-2026

写真家・東京造形大学名誉教授 中里和人



初めて岩手県を訪れたのは、今から50年ほど前になる。宮沢賢治の生まれ育った花巻市内に泊まり、ずっと訪れたかったイギリス海岸や羅須地人協会を自転車で巡った。北上川の土手に立つと静かな水面が現れ、心地い

い風と雲が流れていた。

その時、花巻駅付近にあった斎藤古美術店に入り、店内にぎっしり並んだ、明治、大正、昭和の花巻土人形に圧倒された。店主から土人形の話をして聞いているうち、賢治と同時代の人形もいるのではと思い、思わず古い土人形を手に入れたのだった。大学を出てからは車で岩手に行く機会が増えた。気づくと、一関、花巻、盛岡、紫波、奥州、遠野、八幡平、雫石など、賢治の詩や童話の舞台になった土地を巡るようになっていた。

大学時代に一賢治ファンだった私は、卒業後に写真家になった。1993年、写真家として初めて宮沢賢治に関する撮影がおとずれた。

賢治の詩や童話の舞台になった岩手の土地を巡り、1995年『岩手県、ポラン町、字七つ森へ』(文/和順高雄、偕成社)というビジュアル本を出版した。ちょうど、宮沢賢治生誕100年の年だった。撮影では、岩手の地形、気候、自然、暮らしの豊かさを、春、夏、秋、冬の四季を通じ追いかけた。

そこで私は、宮沢賢治が岩手に生まれ育ち、この土地からもらった自然や、自然に働きかけた人間の痕跡などに着目しようと心がけた。それは、賢治が理想としたイーハトーブ世界との交信から生まれた滋養分を、写真に転写していく作業となった。賢治文学が現した、永遠に輝き続ける有機交流電燈のような、多層的イメージとシンクロする撮影でもあった。

その撮影で印象深い風景がいくつかあった。詩に登場する「五輪峠」を目指し、遠野方面へ山中をクネクネと上って行った。峠には五輪の石塔がポツンと建っていた。ふと、今来た峠道を振り返ると、幾重にも連なる山のハテから谷間をぬける気の流れが舞い降りてきたのだった。

「銀河鉄道の夜」の舞台の一つ、奥州市「種山が原」には、牧歌的な緑の牧草地が広がり、頂付近に小さな岩の塊があった。その頂に立った瞬間、思わず息をのんでしまった。いきなり360度のパノラマ風景が広がり、空を駆けめぐるような手放しの開放感がやって来たのだった。

どちらも、鉱物学や科学の眼差しを持ち、自然と深い対話のできた賢治だからこそ遭遇できた地点だと思った。私の中でも、人が土地を読み込む時の原初的センサーが起動し出し、遙か彼方と交信できるイーハトーブの磁場に案内されていたのだった。

その後も岩手県と強い縁で結ばれるようになり、平凡社別冊太陽宮沢賢治特集号の、2014年『宮沢賢治 おれはひとりの修羅なのだ』、2023年没後90年『宮沢賢治 ほんたうのさいはひは一体何だろう』、2026年生誕130年『宮沢賢治 詩の世界』を撮影していくこととなった。

中でも2023年の特集号で、花巻市大迫町にある「早池峰と賢治の展示館」で、大きな出会いがあった。旧稗貫郡役所を改装した小さな施設には、周辺で採取された岩石標本、賢治にまつわる資料などが丁寧に展示されていた。宮沢賢治は盛岡高等農林学校研究生だった1918年（大正7年）、この地に稗貫郡地質及土性調査で訪れ、館内に復元展示された石川旅館にも宿泊していた。

展示を眺めていると、頑強な老人が朴訥とした口調で解説してくれた。話してくれたのは館長の浅沼利一郎さんで、展示された賢治に関する石の標本は、全て彼が採取したものだった。壁に貼られ

た大正時代の土性調査図を見ながら浅沼さんの話を聞いていると、早池峰の気圏から賢治が語りかけてくるような不思議な館だった。

そこで館長から、「風の又三郎」の原風景になった場所へ行ってみるといいと進められたのが、大迫町外川目地区だった。付近に又三郎が転校してきたような旭ノ又小学校跡（現在公民館）があり、清水がコンコンと湧き出す洞窟やモリブデン鉱が採れる猫山があった。又三郎の父親はモリブデンを求める鉱山技師であり、そばには旭の又川と呼ばれる又の付いた小川も流れていた。訪れた日は川の流れが激しく、ゴォーゴォーとすさまじい音を響かせていた。目を閉じて水流に耳を傾けると、急にザーザーと風のような音が混じり出した。そこで私は、水音が風音に変わり、森の化身のような水の又三郎に出会っていたのだった。

この界限には、今も「風の又三郎」の原風景が残り、賢治のイーハトーブ世界を旅する、貴重な機会を与えてくれた浅沼館長には心から感謝している。

そして現在、私は生まれ育った三重県多気町の実家を、ギャラリー sana villageとして始動させている。2023年には、宮沢賢治の絵本『かしわばやしの夜』を出した絵本作家中野真典さん、別冊太陽宮沢賢治特集号を撮影した私とで、「宮沢賢治二つの世界」展を開催し、地元の友人にチェロを奏でてもらった。

現在、ギャラリー sana villageでは、写真家、美術家、建築家、音楽家、林業家、華道家、農家、語り部など、地域の方々と協働運営を始め5年目になる。賢治には理想的なライフを求め活動した羅須地人協会の活動があった。私は今、羅須地人協会分館のような場を夢見つつ、ほそぼそと社会に開いた文化活動を実践しだしている。



（ギャラリー sana village「宮沢賢治朗読会」会場風景 2025年）

賢治からの卒業はいつのことか。

双子のライオン堂・店主 竹田 信 弥



「『けれどもほんたうのさいはひは一体何だらう。』 ジョバンニが云ひました。」

朗読家の声が狭い店内に響く。参加者はみな、各々の姿勢でその声に耳を傾けている。本に目を向ける者、目を瞑って声に集中する者、朗読する表情を見つめる者――。

わたしは東京・赤坂で「双子のライオン堂」という小さな本屋を営んでいます。この風景はお店のある一日を切り取ったものです。現在、一年かけて宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』をゆっくり読んでいく会を開いています。これまでも賢治の読書会を何度も開催してきましたが、生誕130周年という節目に何か特別なことをと、朗読家をお呼びして1章ずつその場で読んでもらいながら感想を語り合う、少し贅沢な会を始めてみました。

実際に声となった賢治作品の朗読を聞くのと、ひとりで頭の中で読むのとでは、まるで違った印象を受けます。参加者から「声に出して読むために書かれたのではないか」という感想も出てきました。(実際に賢治は自作を朗読していたと言われている)

賢治は本当に魅力的な作家です。文学的な分析をするならば、テキスト内にある記述だけを読み解くことが大切だとされています。わたしも概ねその考えに同意なのですが、賢治だけは例外にしくなってしまう。人間そのものに魅力があり、人と作品が切っても切れない、そんな作家なのです。

賢治の魅力をもっと知ってほしい。そして、わたし自身ももっと知りたい。そう思い、自分の店で発行する雑誌『しししし』の創刊号でも賢治を特集しました。

なぜ、わたしは何度も賢治の読書会を開催し、特集雑誌まで作っているのか。それはきっと、大学の卒業論文で宮沢賢治をテーマにして「失敗した」

からなのだと思います。

研究テーマに賢治を選んだ理由は、作中に描かれる独特なモチーフが魅力的だったからです。動物が話し、時には電柱までも動き出す。しかし、ファンタジーのようであり、極めて現実的な手触りも含んでいる。この魅力をどうにか解明できないか――。しかしテーマを選んだ直後、これは大変な世界に足を踏み入れたと痛感しました。

とても大学生の卒業論文で解明できるような相手ではなかったのです。そもそも賢治に魅了された先人はあまりに多く、先行研究を探るだけであつという間に時間が過ぎていきました。あまたの議論が尽くされた中で、付け焼き刃の知識しかない大学生が入っていけるような、新しい問いの余白はほとんど残されていないように思えました。

そんな絶望感を味わい、原稿を進められずにいた大学四年生の夏休み前。テーマが決まらない焦り(そして就職も決まらない焦り)を抱えたわたしは、担当教授に相談しました。すると教授は「作家が生活した土地を歩くことで、作家の目を獲得できることがある」と言ってくれたのです。わたしはすぐさま岩手・花巻へ向かいました。

賢治作品の多くは、彼が「イーハトーブ」と名付けた岩手県花巻市周辺を舞台に書かれています。

北上川の河川敷、いわゆる「イギリス海岸」に立ったときのことです。川の白い泥岩が露出した光景を目にしました。客観的に見れば、それはただの地層であり、地方の河川敷の風景にすぎません。けれど賢治のフィルターを通してその場所を見ると、そこが太古の海や、まるで別の国の海岸のように見えてくるのです。現実の街並みの上に、まったく異なる架空のレイヤーを重ね合わせる、賢治は今でいうVR(仮想現実)やAR(拡張現実)のような視線で、自分の街を見ていたのではないか。そう強く思えた瞬間でした。

帰りの電車で体験したことから、キーワードを書き出しているうちに、ふと二つの言葉が目に残りました。それは『銀河鉄道の夜』というタイトルに含まれる、「銀河」と「鉄道」です。

この言葉自体はそれほど特殊な言葉ではありません。それぞれの言葉から様々なインスピレーションが広がりました。鉄道＝近代的、現実的、人工的なものと、銀河＝幻想的、永遠性、宗教性。どこか対立し遠く離れたように思える二つの言葉を、賢治はあたりまえのようにひとつの言葉として結合させ、読者に対してあたかも最初から存在していたかのように思わせる手法の凄まじさ。これこそが、賢治ワールド全体に通じるテーマなのではないかと考えたのです。

こうして卒業論文のテーマは、「賢治作品における『鉄道的』と『銀河的』の分析」に決まりました。しかし、これこそがさらなる迷宮への入口でした。最初は順調に思えたものの、作品をその二点から読み込めば読み込むほど、「鉄道的」「銀河的」というキーワード自体に思考を揺さぶられていきます。

そもそも、「鉄道」という近代技術の象徴の中にもどこか人智を超えた恐ろしさや神秘性があります。一方で「銀河」もまた、天文学や科学的な解釈が可能な対象です。二つ言葉の境界は曖昧になり、永遠に同じ場所をぐるぐると巡っているような感覚に陥りました。

卒業論文は、最終的にその混乱も含めてかき集める形でなんとか提出し、大学を卒業することはできました。しかし、どこか不完全燃焼で悔しい思

いがずっと残ったままになったので、社会人になってからも、ひっそりとわたしの中で賢治との対話は続いていました。それから数年が経ち、本屋を開くことになったとき、読書会や本作りを始める中で真っ先に頭に浮かんだのはやはり賢治でした。お客さんと一緒にもう一度、あの賢治の世界へ入っていく。素人の域は出ませんが、みんなで賢治作品を探求して、何かまた掴めるのではないかな。

実際には12年ほど本屋を続け、賢治に関するイベントや出版をいくつかやってきましたが、まだまだ奥が深く、卒業できるのはいつになるか全く見えていません。

でも、幸せです。あの学生時代、もし賢治の謎をすっきり解明して「卒業」できていたら、いまわたしは本屋をやっていなかったかもしれません。そう考えると、すっきり卒業できなくて本当によかったのだと思います。むしろ、まだ卒業できていないからこそ、今日も賢治との対話は続いているからです。



結い — 賢治が繋ぐ心と心 —

「わからなさ」に導かれて
～エミリイ、稲造、早池峰～

公務員 千葉 哲



正直に言えば、私は賢治作品がよく理解できない。それでも、これまで何度か賢治と出会ってきた。

最近では、エミリイ・ディキンソンの難解な詩に悪戦苦闘していた時。同時期に偶然、賢治に

向き合う機会が重なり、両者の「わからなさ」がどこか似ていると感じた。私は両者を無理に理解するのを諦め、共通性を探ることにした。

両者は時代も場所も異なる。19世紀アメリカを代表する詩人のエミリイは、アマスツで生涯の大半を過ごし、賢治は花巻に生きた。一見、接点はない。しかし、両者をゆるやかにつなぐ存在として、親友同士でもある新渡戸稲造や内村鑑三ら、札幌農学校関係者が浮かび上がった。1896年にエミリイの詩が日本で初めて紹介された時、紹介者

のメイベル・トッドは札幌で新渡戸と対面した後、北海道北部でエミリイの詩を紹介した。新渡戸は後に賢治が学ぶ盛岡中学で講演を行い、内村もアマーストで暮らした後に花巻を何度か訪れている。賢治が直接的にエミリイの作品から影響を受けた可能性を探ったが、決定的な根拠は見つからない。行き詰まる中、大阪樟蔭女子大学の武田雅子名誉教授から「接点が見つからないにも関わらず、両者に共通性を感じる理由を探ることも重要ではないか」という助言を得た。

転機となったのは、偶然に山岳信仰の世界に触れ、賢治の故郷の早池峰が信仰の一大聖地だったことを知った時。その事実によって導かれて大迫を訪ねた際、早池峰賢治の会の浅沼利一郎会長(当時)から「賢治が作品に描いた山に実際に登らなければ、作品は理解できない」との助言を得た。

その言葉に従い、未経験のまま1人突風の早池峰へ登り、繰り返し登るうち、賢治の言葉が現実の風景と混ざり合って身体へ染み込むように感じた。そして、賢治とエミリイの共通性として私が感じる「何か」の核には「信仰」があるように思い始めた。両者が生きた時代は、既存の宗教が揺らいだ時代でもある。山や自然、言葉の無意識の響きなどに「信仰のような何か」を見出そうとする姿が、両者の作品に独特の響きを与えているのではないか。

とは言え、私は未だにわからない。それゆえ嘲笑されることもあるが、一方で、新渡戸基金の藤井茂理事長、そして、宮沢賢治記念館の牛崎敏哉館長から様々な助言を頂く幸運にも恵まれた。そしてこれからも「わからなさ」に導かれ出会い続けたい。そこには、新渡戸が賢治に与えた影響など、どこかで結ばれ、解けない問いが幾つもひろがっている。



大地を歩けば、言葉になる

俳優/ものがたりグループ☆ポランの会メンバー 鈴木太二



現在、私が所属する「ものがたりグループ☆ポランの会」のYouTubeチャンネルでは、毎週、宮沢賢治さんの心象スケッチや書簡を朗読しています。舞台の上とは違う、録音機材の前だけの小さな時間。それでも賢治さんと一対一で向き合える、私にとって大切なひとときです。

賢治さんとの出会いは、小学校三、四年生の頃です。図書室で『春と修羅』を見つけ、手に取った理由はいたって単純で、タイトルがかっこよかったからです。「修羅」の響きは漫画やゲームにも登場しますし、分厚く大きな本には子ども心に「何かすごいものを読んでいる」という存在感がありました。かっこよさに命をかけていた子どもにとって、これ以上の一冊はなかったのです。

もちろん、内容はちんぷんかんぷんでした。それでも言葉のリズムはどこか楽しく、いつか意味がわかる日が来たらきっと面白いだろうと思ったものです。中学、高校、社会人になってからも、折にふれて頁を開くようになり、紆余曲折を経て役者となりました。長年読み続けてきたこの作品を人前で声にする機会に恵まれたことには、どこか運命のようなものを感じています。

はじめはただ言葉を追うだけの朗読でした。ですがポランの会の活動を通じ、地元の方々のご協力のもと、賢治さんが歩いたであろう岩手の大地を数多く巡らせていただきました。景色を見て、歩いて、肌で感じるうちに、想像だけを頼りにしていた言葉が少しずつ実感を伴い、自分の中で息づいていくのを感じました。特に、焼走り鎔岩流を実際に歩いた時に自然と言葉になって溢れた時の感覚は忘れられません。

YouTubeでの朗読を始めたのは、ポランの会の活動を知っていただきたいという思いもありました。ですがそれ以上に、自分が音で聴きたいと思う作品が見つからないなら、自分で作ればいいの

では？という、シンプルな思いがきっかけでした。有名な童話や心象スケッチの朗読は数多くありますが、私が聴きたかったものはなかなか見つからなかったのです。ならば、自分で声にしてみようと思いました。同じように聴きたい人が見つけれられるように。

いわば自給自足の朗読です。ですが毎週ひとつずつ声にすることは、賢治さんの言葉を読み直し、自分自身の声や感覚を見つめ直す時間でもあります。書簡には生活者としての体温があり、心象スケッチには一瞬の光や風をそのまま掬い上げたような息づかいがあります。その一つひとつに耳を澄ませながら、まだ多くの人に届いていない言葉

を、これからも少しずつ、声にして手渡していけたらと思っています。



■「賢治の世界」セミナー 2026

令和8年で17年目となる「賢治の世界」セミナーを、花巻市内の小・中学校、高校を会場に開催しています。花巻東高等学校では、東京都出身で明治学院大学文学部名誉教授の富山英俊さんを講師に迎え、「宮沢賢治作品の翻訳」というテーマで講話をいただきました。特別進学コースの生徒たちは、英語の授業に力を入れて勉強していると伺っていましたが、宮沢賢治作品の翻訳を扱うのは初めてということで、新鮮な内容であったと思います。「どんぐりと山猫」「鹿踊りのはじまり」「永訣の朝」などを様々な翻訳で比較するなかで、「方言」という特徴も難しい部分のひとつだといいます。「一口に英語と言っても、世界にはさまざまな英語が存在します（日本に方言があるように）。ひとつの英語だけが中心にあるわけではないという現実を認め、尊重しあうことが、翻訳のうえで大切なことです。」というお話が印象的でした。



■「賢治の世界」ワークショップ2026

5/30(土) 啄木と賢治の短歌世界

25名の参加がありました。盛岡市洪民の石川啄木記念館での展示解説のほか、啄木の第一号歌碑設立と賢治の関わりや花巻にある啄木歌碑について、啄木記念館長の藤原様に優しく丁寧に解説して頂きました。参加者は昨年リニューアルオープンして新しくなった展示室を興味深くご覧になっていました。今回は、大西久美子氏を講師に迎え、啄木と賢治の短歌の相違点と類似点を時系列に対比してご説明いただき、参加者から「大変分かりやすかった」、「新しい発見があった」というお声がありました。自由時間は、「道の駅もりおか洪民たみっと」にて、昼食や買い物を楽しみました。全体的にゆったりした日程で、じっくり展示を鑑賞したり、周辺を散策したり、各自のペースでワークショップを満喫することが出来ました。



《特別展》のお知らせ

◆「セロ弾きのはなし」

～童話「セロ弾きのゴーシュ」先駆形～



期間：

【前期】令和8年10月3日(土)～令和9年2月14日(日)

【後期】令和9年2月20日(土)～5月30日(日)

会場：

宮沢賢治生誕130年を記念して宮沢賢治記念館では特別展「セロ弾きのはなし」を開催します。童話「セロ弾きのゴーシュ」は原作に忠実な絵本やアニメーションとして多くの世代に親しまれている作品であり、本展では賢治が晩年まで手を加え続けた直筆稿や構想メモに見られる推敲の跡から作品成立の過程とそこに込められた熱量を紹介します。当初は主人公名が「セロ弾き」とだけ記され、「ゴーシュ」という名前が後で付け加えられたことや、賢治自身がチェロを弾いていた経験が物語の重要な構成要素になっていると想像される点にも注目し、愛用品のチェロや直筆稿を公開して賢治の音楽に対する思いも感じていただける展示とします。展示は前期・後期の二期構成でお届けし、会期中には生誕130年を記念した音楽イベントも開催予定です（詳細は決まり次第、宮沢賢治記念館のホームページ等でお知らせします）。開館時間・入館料・アクセス等のご案内も同サイトでご確認ください。皆さまのご来館をお待ちしております。

来館者の声



- ・米津さんの「カムパネルラ」という曲を聴き、賢治さんのファンになり千葉から来ました。不思議な世界に心ひかれたので、また来ます。
- ・ヨルシカのライブついでに来たのですが、もっと早く賢治さんのことを知りたかった！
- ・賢治さんの「星めぐりの歌」が好きで、「星めぐり」をテーマに俳句を詠んだら、高校生の代表として選出していただけました。賢治さんの言葉に触れることができ嬉しいです。
- ・シンガポールから来ました。元々アニメのきっかけできたのですが、これからもっと宮沢賢治

の作品を読まなくてはと思います。ありがとうございます。

- ・初岩手！姉と一緒に来ました。子どもの頃伝記を読んで、すごい人だと驚いたのを覚えています。気づけば賢治さんが亡くなった歳に近づいている…。大人になって、また違った気づきや印象を持ちました。

* 編集後記 *

「ものがたりグループ☆ボランの会」のYouTube動画を、以前からよく拝聴していました。「読む」ことでは難しかったことも、「聴く」ことで何か気が付くことができると常々感じています。読んでくださる方が感じたことを自分なりに受け取るという感覚もありますが、そうしたことで作品理解の可能性が広がることは本当に素晴らしいことだと思います。

(Y.S)